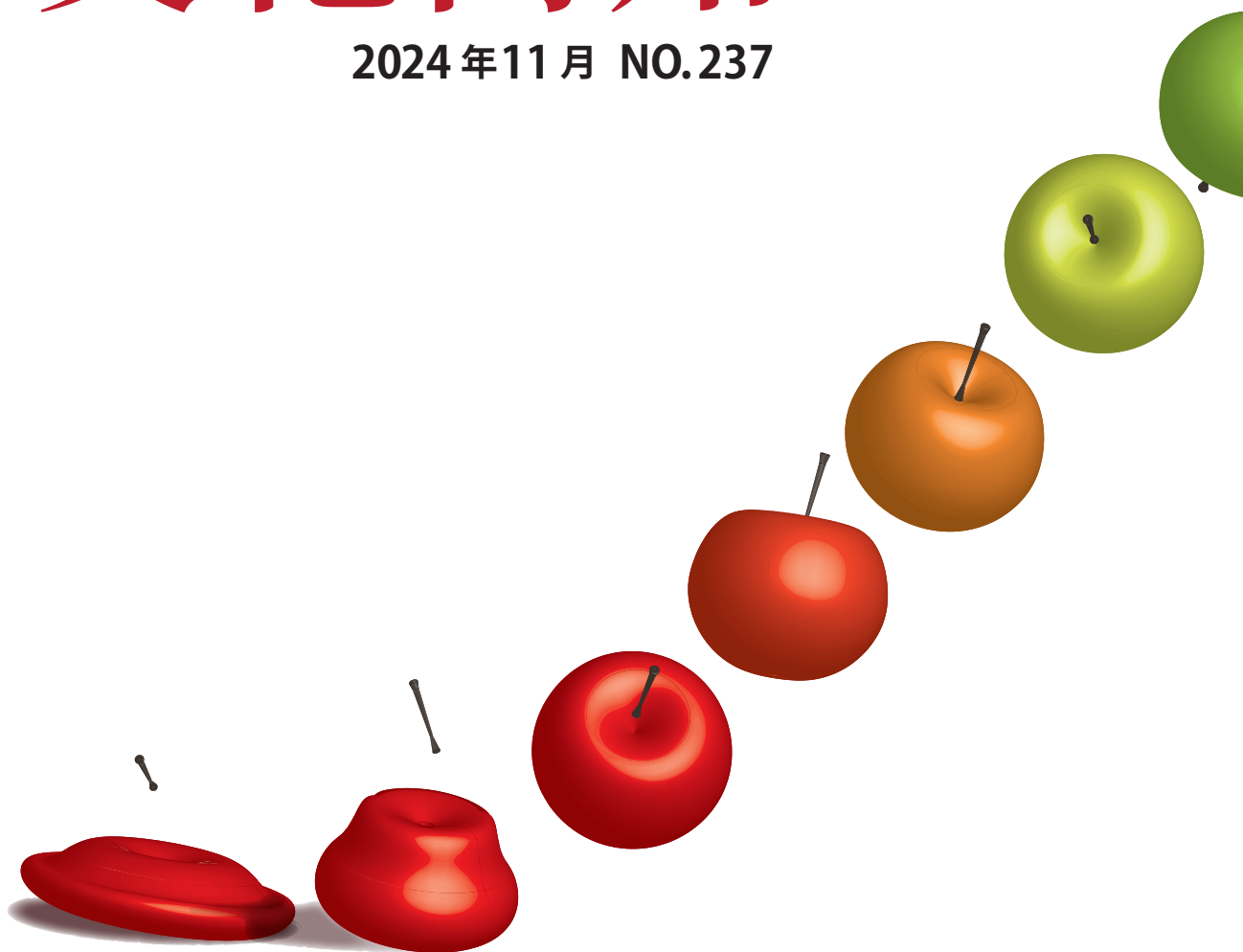


子どもから大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を

文化高知

2024年11月 NO.237



[もくじ]

- 2～3 失敗の存在しない町…藤原ちから
- 4～5 世にも珍しい仏像工房発のPRサービス…吉田沙織
- 6～7 「食」を通じて日本文化を学び健康で心豊かな毎日を一和食文化の保護・継承…百田美知
- 8～9 すごい、と思える本に出合ったので報告します…山中由貴
- 10 人と社会をあたためる…松田憲明
- 11 「アンテナ」泳げドラゴン〈準備編〉…下尾 仁
- 12～13 高知市文化振興事業団9～10月の事業から
- 14～15 風俗歳時記・風伯

表紙デザイン：「りんご」千頭 天

公益財団法人高知市文化振興事業団

失敗の存在 しない町

藤原 ちから

神奈川県横浜市の住みながら、年のうち三か月ほどは海外で滞在制作という名の出稼ぎをする……そんな生活を送っている。そしてたまには高知に帰る。そのたびにここは不思議な町だなと思う。

この夏、鏡川の花火大会の帰りに、酔いつぶれて路上で動けなくなったおじいさんがいて、救急車を呼んだ。八十歳を超えているらしい彼の衣服を救急隊員が脱がすと、上半身に鮮やかな刺青が現れた。病院には行きたくないと言いつ張るそのおじいさんは、すったもんだの末、救急車を降ろされた。路上でしばらく隣に座って、彼の妻がタクシードルけにくるのを待つ。様子を見ていた警察官たちも、「ぼくらがおるとタクシードル乗車拒否されるかもしれんき」と言い残して、夜の町へと消えていった。ひっくり返って頭でも打ったらいけないと思ひ、わたしはずっとおじいさんの肩に手を置いていた。じつとりしている。彼の汗なのかわたしの汗なのかよくわからない。そのシャツの下にあるはずの刺青

も、今は見えない。何を呼びかけてもほとんど反応がない彼だが、一瞬、我に返って、ありがとう、とつぶやいた。そしてまた酩酊の世界へと戻っていった。

高知出身の友人が、「高知では酒の失敗がないと言われてきた。なぜならそんなことがありすぎたのを見ないから」と言ったのを聞いて、なるほどと思う。良くも悪くも……なこの寛容な風土も、日本を覆いつつある「正しさ」の波にいずれは呑まれて消え去るのだろうか。それとも高知は、失敗が許される独特な文化圏として残り続けるのだろうか。わからない。ただ、世界各地を旅してみても、あらためて高知は特殊な魅力を持つ都市だと思ひ。よさこいや、日曜市や、商店街にこたつが並ぶ「おきやく」のように、路上をジャックする文化が根付いている。日本では「公共の場所」は国や自治体によって厳格なルールが定められ、人々は自由を制限されて当然、という社会通念に支配されているように思ひけれど、高知ではお祭りや市場となると人々がわらわらと集まってきて、路上を占拠し、自由を満喫する。「公共」や「社会」という概念よりも、「人」の占めるウェイトが大きい気がする。

少し回りくどい話になるけれど、この何年か海外のいろんな文化芸

術機関を訪ねてみて、それらが属人的に動いていることを知った。小規模なアトスペースや団体では、もちろん代替わりや継承はありうるとしても、中心人物がいなくなつたらその活動は変質したり停滞したりする。大規模な劇場やフェスティバルはどうかというたとわたくしが知るかぎりの欧州の事例で言うところ、芸術監督にプログラム編成権が集中し、スタッフの多くもその人物の下に組織されたチームメンバーであるため、彼らが交代すると理念も内容も大きく変わる（アメリカで政権交代が起きるとスタッフが大幅に入れ替わる様をイメージするとわかりやすいかも）。もちろん各地域で長年受け繋がれてきた文化的土壌はあるし、批評メディア、観客、助成機関、個々のアーティストの動向などが複雑に絡み合つて文化は形成されていくのだけれど、少なくとも、顔や名前を持つ「人」によって文化芸術は支えられていると感ひる。ひるがえつて日本はどうかというところ、公共ホールや美術館の多くでは官僚的発想やシステムが大きく作用しがちではないだろうか。数年で部署が変わるのだから、自分では代替可能な存在であるべきだ……という、顔や名前よりも肩書きが優先される官僚的プロフェッショナルリズム。もちろん様々な私立の小劇場やアトスペースもあるし、

公共セクターで働く人たちの中にも熱い志を持った人たちがいるのは知っているけれど、どうもこの官僚的発想やシステムが、厚く垂れ込める雲のようにこの列島を覆っている……そう感ひさせられる場面がたびたびある。

日本の状況分析をここで長々と書くわけにはいかないので、では高知はどうだろうか、とこの文章を読んでくれているみなさんと共に考へてみたい。高知が完璧な理想郷だとは思ひないけれど、顔と名前を持つ「人」の情熱や行動が高知の文化を形づくっている、と言ひことはできるのではないか。

わたしが高知の文化芸術と多少なりとも関わりを持つようになったのは二〇一八年からで、高知県立美術館の松本千鶴さんと共に「地域のアトリエ」シリーズを考案したのが最初だった。この時に、主に高知市を拠点に活動するいろんな人々と出会い、その後すぐにコロナ禍が到来してしまつたといひえ、SNSを通してみなさんの活動を追つたり、帰高時に会つたりして、ゆるやかな交流が続いている。この夏は県立美術館の「Wadi+」の「Paper」、藁工ミュージアムで「ハナカタマサキのおしごと展」、そしてかるぼーとで『十二人の怒れる土佐人』の通し稽古を拝見したけれど、各プロジェクトに関わる人たちがそれぞれが何年もかけて

地道に積み重ねてきたものが実を結んでいる（そしてまだ道はつづく……！）と感じることができた。さらには、音楽茶房リベルテの大野正明さんのプライベートな映画鑑賞会に何度か邪魔して若い映画人たちと会ったり、あるいは美術家や演劇人たちと飲んだり……。高知市の中心部は、交流を生み出すにはちょうど良い町のサイズかもしれない。路上や飲み屋で偶然ばったり出会うことも、ぎつちりとは言わんけどちょいちょい起こるのが面白い。

そうやって高知で出会ったひとりひとりの顔と名前を思い起こしてみると、たとえ組織に属していても、それぞれ自分の意見を持ち、独自の活動をし、他の誰にも似てない生き方をしている人が多い。器用とは言えなさそうだし、お互いに衝突することもあるだろうけど、わたしが知るかぎり派閥みたいなものはなく、あくまでそれぞれ独立した「一人親方」として、自分の活動に没頭したり、たまには協力しちやうかとなったりする。そしてまだ仮説でしかないけど、高知市内に生きる人たちの「高知」への帰属意識は、日本の他の諸地域に比べるとそんなに強くない気がする。推測だが、「高知」が高知市と高知県の両方を指し、かつ高知市に匹敵する人口規模の市が県内に他に存在しないために、

その範囲の曖昧さが放置されていること（例えば新潟県のように人口の多い市が複数あると、新潟、長岡、上越など各地域のアイデンティティが拮抗するかもしれないけど）、さらには「土佐」という旧名称が今もそれなりに機能していることなどが重なり合って、「高知」という概念は帰属意識によって一致団結する対象になりにくいかもしれない。郷土愛がないわけではない。むしろ高知の人は高知のことが大好きだと感じる人が多い。でも郷土愛が過剰になると、地域への貢献度合いをお互いに監視したり、妙なしがらみが生まれたり排他的になったりするから、「高知」がどの範囲を指すかは曖昧なままにして、変に一致団結とかせざるやかに繋がっていくほうが、外から来る人も入りやすい環境が生まれるだろう。よさこいがチームごとに歌も踊りも地方車も異なるように、同質なものに染まらずバラバラなままに共存するのが、高知の良さかもしれない。

もちろん課題もあると思う。それぞれの考えや活動が紹介されてお互いに共有し合う機会はずっと作れるはずだし（地元のテレビやラジオはもっと高知の文化人に注目してほしい）、四国の他の県や海外などとの人的交流・連携ももっと可視化されていいはず。

移住してきた人たちの声を聞く場もほしい。要するにお互いのことをもっともっと知る場があったらいいのと思う。

実はこの原稿を書くために、この「文化高知」のバックナンバーを十年分くらい遡って読んでみた。ここにもいろんな「人」がいる。このまま四十年前の創刊号まで遡ってみようと思う。近年連載されている下尾仁さん（お会いしたことはまだない）が、「歌って走ってキャラバンバン」のキャラバン賞の常連だったこともこの誌面で知った。わたしはあの番組が大好きで、高知に夏に帰ってくるたびに毎日見ていた。なんで好きやったがやろう……？と今振り返ってみると、もちろん歌の上手さを競う番組ではあるんだけど、それよりも、高知県内の津津浦浦に住む「人」たちの姿を、そしてそのよくわからない情熱の発露を見たかったんだと思う。それは「洗練された」東京のテレビでは決して見ることのできない番組だった。音程の外れている人なんて普通にたくさんいたし、歌詞を忘れたり、インタビュにうまく答えられないでフリーズしてしまう子供とか、そういう場面も「キャラバンバン」には映っていた。それで何の問題もなかった。わたしたちは上手くやるために生きているわけではなく、いのだと、番組をつくる人も出る

人も視聴者も、きつと知っていた。あるいは画面に映る「人」の姿を見て、わたしたちはそのことを学んでいたのかもしれない。番組は終わってしまったけど、あの大らかさはまだ高知に残っていると感じる。だってここは、失敗が失敗と見なされない町、失敗の存在しない町なのだから。

ふじわら ちから

一九七七年 高知市生まれ。

住吉山実里とorangecoreを結成し、横浜を拠点にアーティスト、批評家、ドラマトウルクとして活動。差別や偏見を生み出す「見えない壁」や、人の移動や滞留を促す「モビリティとグラヴィティ」をテーマに、遊歩型ツアープロジェクト『演劇クエスト』を横浜、城崎、マニラ、デュッセルドルフ、安山、香港、東京、バンコク、ローザンヌ、マカオ、マカンダ、高槻、妙高・上越、ミラノで展開。他に映像作品『Stay Home Labyrinth』、キプロスで猫を追う最新作『Maya Dolores』など。月に一度オンラインワークショップ「町を旅する読書会」を開催している。文化庁東アジア文化交流使（二〇一七年）。セゾン文化財団・フェロー（二〇一七―二〇二二年）。

世にも珍しい仏像工房発のPRサービス

吉田 沙織

「またマスコミが来てくれるろう？ がんばらんと！」

高知県夜須町（香南市）の山深いお寺「まきでら長谷寺」で明るい声が上がった。ある一大イベントについて檀家会で意見が交わされる中、ひょうきんな声色に空気が和んだ。私も思わず笑顔になった。

私は、古典技法で仏像を製作する工房「よしだ造佛所」の経営者として臨席していたが、この檀家さんの言葉はPRプロデューサーとして非常に嬉しく思った。

多くの集落で高齢化・人口減少が進んでいる。このお寺の周辺も例外ではなく、人が減る一方だ。市街地から離れた立地ということもあり、訪れる人は月に一、二組あるかどうかという状態だったそうだ。それが、三年ほど前から毎日二、三組の参拝者が来るようになった。初対面の人から「ああ！ あのお寺か」と言われるようになり、イベントの企画なども外部から持ち込まれるようになっていく。さまざまな要因があるが、お寺

の取り組みをPRプロデューサーとして支援させてもらったことも一端を担っていると自負している。

このお寺だけで、のべ五十媒体以上のメディアに取材されたのだ。

私は今、限界集落に住みながら、工房経営とPRプロデューサーをしている。しかも、神社仏閣や伝統文化に特化したPRをする変わり種として。コロナ禍に必要な駆り立てサービスを立ち上げた。始めるきっかけとなったのは、前述のまきでら長谷寺の「仁王像修理プロジェクト」だ。

「仁王さん」は力強い姿だが、山門で風雨にさらされて苔が付き、虫害も目立っていた。接合部位は緩んで隙間だらけ、手や足は朽ち、寺院関係者は長年胸を痛めていた。かつては広大な寺領を誇るお寺だった。立派な仏像群がそれを物語っている。しかし、時代の移り変わり、遠くない将来インフラの維持も困難になるのではと心配されているのが現状だ。そんなお寺にとって、二メートルを優に超える二

体の修理はとても手が届かない金額で、助成事業に応募しては何度も落選。世代をまたいで粘ったがついに諦めかけていたという。

そこへ光が差した。仁王像修理に使って欲しいと多額の寄進があったのだ。そのような時期に、私たちは東京から高知へ移住してきたのだ。

二〇二〇年、満を持して修理プロジェクトが始動した。檀信徒さんが途中経過を見に来られるよう、家族でお寺の近くに移住し工房を構えた。寺院関係者や地元の人と交流していると、百年以上のスパンで行われる大事業に踏み切りお寺や集落を護持しようと踏ん張る一方、「私らでここの幕引きをする」と覚悟があることも知った。

客観的に見れば、たしかに集落を看取る時期に入っているのかもしれない。「それでも、仁王さんを元気にしたい」という人々の姿に感動を覚えた。同時に、「仕事だけすれば良いのだろうか？」という疑問がフツフツと湧いてきた。

「これは広く発信するべきではないだろうか。ここに生活者がいることや、故郷への思いを後世に残したい！」そんな思いに突き動かされた。

アルゴリズムに支配されるSNSでは届ける規模に限界がある。そこで、高知県下の新聞社やテレビ局に自己流で書いた報道資料に手

紙を添えて出した。それが、メディアPRと呼ばれる活動であると当時の私は知らなかったが、これがPRプロデューサーとしての一歩となった。

結果、初めてのPR活動では五社のメディアに取材いただけた。放送・掲載された日だけではなく、SNSで記事を拡散することで、県外の人にも知ってもらうこともできた。今でも当時の記事が一部インターネットで閲覧できるし、最近では地元の小学生が記事を切り抜いて保存してくれていることも知った。きつと何十年先だって残るだろう。

テレビや新聞の影響で、工房に見学に来てくれる人、お寺に参りに来てくれる人がポツポツ現れ始めた。「よかった、次は修理完成の時にまたメディアさんに連絡しよう」と考えていた。

ところが、ホッとしたのも束の間。コロナ禍で法要やイベントが中止となった寺社が、神仏像の製作や修理を見送り始めた。今度は工房の注文が途絶えてしまい、経営難に陥った。さらには、頼りにしていた業界トップの鍛冶屋さんや製材屋さんが廃業してしまった。職人を支える職人がどんどん消え始めたのだ。先行き真つ暗だった。暗澹たる思いで「仁王像の修理が終わったら工房をたたもうか」と、しよつちゅう夫婦で話していた。



お寺で取材を受ける吉田仏師。これもPRの成果のひとつ。

「いや、仏師の伝統技法を途絶えさせてはいけない。営業に行けないならどうすれば知ってもらえる？」「ここで終わらないぞ！」と奮起したとき、思い出したのがメディア掲載の効果だった。取材してもらったためにPRという手法があることを知り、専門的に学ぶことにした。

PRプロデューサーというと、一般企業の広報をイメージされる方が多いと思う。しかし、PRはパブリックリレーションズは、簡単に言うとさまざまな人とのより良い関係を作ることであり、誰にでも門戸が開かれている。私も知識ゼロの状態からスタートし、学びながらひたすらプレスリリースを書いた。テレビ番組や新聞記事を研究し、ドキドキしながら初め

てメディアに電話したことは忘れられない。

次第に、催事の情報発信だけでなく、企画提案から介入しPRを行うようになっていった。すると、お寺の参拝者が増えたり、工房へ立て続けに注文がきた。メディア掲載がさらにメディアを呼び、学術論文でも取り組みが紹介されるなど、思わぬ連鎖が起き始めた。PRの影響であることは明らかだった。私は、神社仏閣にも伝統文化に携わる職人にも、PRは必要だと確信した。

しかし、PRサービスの事業計画を作ったとき、ほとんどの人が「仏像製作を専門とする工房がPR？」と首をかしげた。一般的に、企業が行うものというイメージが強く、神社仏閣に関わるPR



PRサービスでビジネスコンテストのファイナリストに選出され、プレゼンを行う筆者

はピンとこない、あるいは難しいと感じるようだ。PR以外の専門知識と、社会性とのバランス、信仰を毀損せずに認知拡大するため配慮が求められるためだ。

その点、仏像に携わってきた経験が活かされた。仏像製作は信仰対象であることを前提に、歴史的・芸術的価値を損なわずに物理的・科学的に安定した状態を作ること、「自分の作品」としてではなく社会的な視点も持って敬意を払うことが重んじられる。この態度は、神社や伝統文化関係のプレスリリースの切り口を開発する際にも共通だと考えている。神仏像は、神仏の徳を荘厳し、教えを視覚的に伝える機能をもつ。守り伝えてきた遠い祖先との繋がりも感じさせてくれる。PR事業として異色でも、私にとっては神仏や先人の遺徳を荘厳し伝えるという点で、仏像事業と矛盾がなかった。

そこで、神社仏閣・伝統文化専門のPRサービスの名前を、荘厳と同音である「承欣」と名付けた。先人から伝えられてきた喜びを受け継ぎ未来へ伝えるPR、そんな意味を込めた。承欣のPRは、ただ露出を増やすのではなく、地域や文化、歴史と「今」をつないで未来を紡ぎ出すこと、人と人、人と歴史、人と地域など、あらゆるつながりのより良い関係を目指すものだ。

二十年ぶりにUターンしてきた故郷・高知は眩しい。地域の温かな支え合い、古制と現代が絶妙に混ざり合った風土や祭祀、手付かずの文化財など、土地土地特有の豊かな文化や歴史がいかに尊く大切であるかを再認識させられている。歴史を知れば今の自分が見えてくる。遠い未来を描くこともできる。そんな座標軸をPRで残せたらどんなに良いだろう。

冒頭の檀家さんの言葉は、宝物になった。PRを味方にすれば、生きがいや応援することもできると教えてくれた。「この世は苦」だからこそ、希望ある物語を少しでも広く届けて、豊かな文化と歴史を持つ高知の可能性をもっとと拓いていきたい。

よしだ さおり

一九七六年 安芸郡東洋町生まれ。土佐塾高等学校卒業。

よしだ造佛所共同代表。神社・伝統文化PRサービス「承欣 SHOW-GON」および地方自治体向けPRサービス「Loco CAST」代表。趣味は茶道、弓道、雅楽（龍笛）。神社仏閣で祭典奏楽も行っている。

「食」を通じて日本文化を学び健康で心豊かな毎日を —和食文化の保護・継承—

百田 美知

【和食月間】

十一月二十四日は、1（い）1（い）2（にほん）4（しよく）と語呂を合わせて「和食の日」です。また十一月は、その年の自然のめぐみに感謝し、翌年の五穀豊穡を祈ったお祭りが全国各地で行われる日本の食文化にとって大切な季節であり、それらの理由から、「和食月間」に制定されています！

【和食文化を学ぶようになったきっかけ】

バブルが崩壊し、急速なデジタル化による業務改革が進んだ一九九〇年代。私は大阪で、「無駄は悪」とばかりにモーレツに働く会社員生活を送っていました。

二〇〇一年、結婚を機に高知へ移住すると、自然豊かで、人と人が深く関わり生活している様子を目の当たりにして、これこそが人間らしい生活だと感じました。自然に寄り添う生活は、時として思い通りにはいきません。デジタル化できない、決して無駄ではない「時間」や「心」の余裕が必要であることを知りました。

あちこちの土地で人と出会い、交流を重ねる中、体調を崩したことをきっかけに、その土地の作物を食べ、自然の摂理に逆らわずバランスよく生活することの大切さを説く「葉膳」を学び、和食や郷土料理に注目するようになりました。

郷土料理は、健康的な食であることは勿論ですが、その土地の風土が大きく関わり、歴史的背景や暮らしの中から生まれています。郷土料理を知ることで、必然的にその地域に対する理解が深まり、知れば知るほどに愛着が湧いていきます。そして次第に、自分が魅了された人や地域を紹介する活動を行うようになっていきました。

【ユネスコ無形文化遺産に登録された「和食」】

二〇一三年十二月四日に「和食」がユネスコ無形文化遺産に登録されました。

提案書での名称は、

WASHOKU : Traditional Dietary Cultures of the Japanese-notably for the celebration of New Year-

日本語での名称は、

和食・日本人の伝統的な食文化―正月を例として―

ユネスコ無形文化遺産に登録された「和食」は、特定の料理を指すのではなく、多様で、自然を尊重した、正月など伝統行事として受け継がれている「食文化」のことです。そして、その実践者は一部の専門家や料理人だけではなく、「全ての日本人である」と記されています。他人ごとのように思っていたユネスコ無形文化遺産登録でしたが、私も担い手の一人であったとは思いませんでした。

和食文化を次世代へ継承するための活動を展開している団体として、一般社団法人和食文化国民会議（以下、和食会議）があります。

和食会議には、「調査・研究」「普及・啓発」「技・知恵」「全国「和食」連絡会議」の四つの部会があります。「全国「和食」連絡会議」の役割は、「和食」の保護・継承に取り組んでいる団体・個人と交流し、連携することです。毎年、登録記念日の十二月四日には「1204和食セッション」という交流会が開催されます。地域で活動する私が、「全国「和食」連絡会議」の幹事と「和食」地域特派員」を拝命しているのは、「地方には、保護・継承すべき食文化が多く残っている」という意味が込められているのだと思っています。全国の和食の保護・継承活動を行っている人々と交流することは、自分が住んでいる地域の食文化と他の地域との共通点・相違点を知り視野が広がり刺激を受けます。

【食育授業】

和食会議の活動のひとつに、「だしで味わう和食の日」があります。この活動は、十一月二十四日の「和食の日」に合わせて、小中学校や保育園、



和食駅のキャラクター・わじきカッパ君

幼稚園に協力と呼ばびかけ、十一月の任意の一日の給食を和食献立にし、その中に「だし」を感じられる汁物を入れてもらいます。また、だしの教室を合わせて行うことで子どもたちが和食の基本である「うま味」を味わい、学び、日本の食文化についてあらためて考え、話し合う機会をつくる取り組みです。

この教室が始まった当初、活動を広めるために、ごめんなはり線の和食駅（「わしよく」ではなく、「わじき」と読む）のキャラクター「わじきカッパ君」が、和食PR大使に任命されました。任命式の時、地元の方から、和食駅は「全国難読駅名」の一つだということや「和食」の名前の由来について教えていただきました。一見、食とは直接関係なさそうなことにまで発展して広がっていききました。

私は、芸西小学校の「だしで味わう和食の日」に講師として参加して以降、この活動に賛同し、自分でも教室を開催するようになりました。私の「だし」エピソードで欠かすことのできないものの一つに、高知出身の作家・宮尾登美子さんの雑煮のだし、「鏡川のはぜを干しただし」があります。これに興味を持ったことをきっかけに、ナント！今では私、鏡川で釣りをしています（笑）。釣りを教えてもらいながら、ゆっくり時間をかけ、海・山・川のつながりや周辺の地質、川の生き物についても学んでいます。いろんな魚を「だし」に活用することも知りました。私の「だしで味わう和食の日」は、それら自分の経験から、日本の地形や地質に関わる「硬水」と「軟水」の違いについてなど、レシピには書き表せないことを入れることが一つ。もう一つは訪問した学校や地域の産物を取り入れること。この二つに重点を置いて子どもたちに伝えていきます。例えば、香美市の小学校では、香美市に伝わる「ハチマキ大豆」を使った精進だし、田野中学校では、同校の生徒たちが栽培と販売に関わっている「田野恋茶」、南国市の小学校では、県の天然記念物「白木谷のタチバナ」などです。

「伝える」ということ

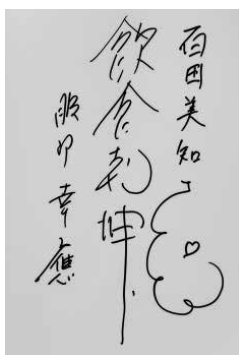
現代社会は、何かと慌ただしく、昔と同じ

ように手間暇かけた郷土料理を作ることが難しくなっています。嗜好や環境の変化により、使われなくなった食材は消え、伝えられない知恵は忘れ去られていきます。個人や家族だけではできない地域の共同作業や神祭などの行事も少子高齢化で今まで通りには行えなくなりつつあります。限られた時間に、溢れる情報社会の中で、私が伝えたい「食文化」に関心を持ってもらうには、どう言葉に表していけば良いのか、大きな課題です。先の食育授業や、このような苦手な文章を書くことは、自分の考えを整理する良い機会になっています。

以前、自分の言葉足らずが原因で、うまくいかなかったことがあり悩んでいた時、「自分が好きなことは誰に遠慮することもない。最後までやれ！それだけのめり込める好きなことがあることは幸せなこと。それを追求し学び続けていれば、いつか相手にも伝わる。」と励まされたことがあります。

そうだ、とにかく一生懸命、学び続けていよう！

食育乾坤（いんしよくけんこん）
食べることはすべて、二度と同じことはないだろう



全国「和食」連絡会議で、議長のご・服部幸應先生から頂いた著書『食育入門 食育を正しく伝える人になる。』に記された言葉。

ももた みち

一九六九年生まれ 大阪府出身。
薬膳・和食文化研究家、一般社団法人和食文化国民会議「全国「和食」連絡会議」幹事、「和食」地域特派員

すごい、と思える本に出合ったので 報告します

山中 由貴

それは、第一七一回芥川賞を受賞した、松永K三蔵さんの『バリ山行』だ。

「バリ」とは「バリエーション」の略で、整備された登山ルートを使わずに道なき道を切り拓きながら進む、よりハイレベルな山歩きのことだという。

登山を趣味とするようになったわたしは、これは読まなければと手にとった。

なによりも文章の簡潔さ、読みやすさにまずは驚く。読みやすいつつはすごいことだと、この本を読んであらためて思う。何度も推敲されて、よけいなものは削られて、芯だけが残っている。選びとられたことばがきりつとし

ている。会話に漂う空気には質量があつて、あ、この感じ経験したことがある、と読者に思わせるのがうまいのだと思う。

主人公は建物の外装工事を請け負う「新田テック建築」に転職してきて二年目の波多^{はた}。同僚から「山に行きませんか」と声をかけられたことで、彼の人生に登山が侵食してくる。

職場のメンバーで六甲山に登り、ロックガーデン、風吹岩、雨ヶ峰からの山頂までを登る王道ルートを愉しみ、景色を眺め、沸かした湯でつくったカップ麺をすすり、インスタントコーヒーを呑む。ふだん味わえない体験に波多はいつ

しかはまっていくな。ウェアや山道具をそろえ、会社の「登山部」として数人のメンバーで山登りに行けば、登山アプリで行程を記録するようになる。

そんなとき、同じ職場の妻鹿^{めが}さんが登山に参加することになった。妻鹿さんは社歴は長いが人と群れることなく口数もすくない、よくわからない人だった。

登山の日、妻鹿さんは登山計画にあるルートを通らず、途中から合流してきた。常務に請われるとメンバーを連れ、登山道を外れて踏み分け道に分け入るとずんずん進んでいき、別のルートに出てみんなを驚かせた。妻鹿さんは、六甲山を「バリ」で縦横無尽に登る

達人だったのだ。

定められた道から外れて、だれも行かない場所へ、自分の手足と持ち運べる道具だけを頼りに分け入っていくバリ。それはもちろん危険な行為で、「登山部」部長の松浦さんなどは妻鹿さんを厳しく非難する。独りで滑落したり道に迷ったりすれば、多くの人に迷惑をかけることになるからだ。

しかし、地図に道が記されていない奥の奥に入っていく、冒険ともいえるスリリングな山行を疑似体験した波多は、妻鹿さんに興味を惹かれていく。

そして、仕事のミスをフォローしてもらったことをきっかけに、波多は妻鹿さんにバリに連れて行ってもらうのだが……。

そのバリの描写が、とてつもなくいいのだった。

ふだんの登山では使わないような道具を持ち、沢に入って滝に濡れる岩をよじ登り、急登を這うように進む。水流の圧力や滑る岩場、掴まった木の幹のさがさした感

触。周りをとり囲むものすべてが山。圧倒されて、波多は「いいですねー」としかことばが出ない。こんなところに自分がいる、それに感極まって「いいですねー」しか言えない気持ちだが、わたしにはわかる。喜びが凝縮されて伝わってくる。

登山をはじめてから、わたしも独りで山を歩きまわったことがある。怖いので登山道を外れることはしなかったけれど、そこにはわたししか存在しなかった。わたしがつかり動けなくなれば、気づく人はいないかもしれない。そう考えると震えがきそうになるのだが、その震えは興奮の震えでもあるのだ。すべての責任と決定権が自分にあること。なににも左右されない自分だけの進行方向が三六〇度広がっている。それに打ちのめされるようだった。

しかしそれは序の口にすぎず、本番はそこからはじまるのだ。さつさと藪を漕いでいく妻鹿さんを必死で追いかけるも、一歩でも足を踏み外せば死に直結する状況がずっとつづく。断崖をロープを使つて降り（もちろん波多はやつたこともない）、棘や枝に覆われた茂みをただひたすら妻鹿さんについていく。やっと登山道に出たと思えばまたそ

こを離れ、深い山に潜っていく。つらい。疲労困憊で嫌気がさしてくる。対照的に妻鹿さんはどんな生き生きしていく。

経営方針が変わり、業績が悪化していく社内に不安が広がるなか、会社の決定に従わずマイペースに仕事をにつける妻鹿さんは浮いていた。リストラに怯え、それでも家族を養っていかなければならぬ、社会での生存競争に勝たねばならない波多に、山のなかでこんなにも生きる実感を得ている妻鹿さんは、腹立たしいのだった。

会社員としての生きかたと、山で生きるか死ぬかをやることの意味が、はたして釣り合うのか。いままでも、求められて進んできた社会のルートにしかないかった。パリを知って、ルートとは自分以外のだれかが敷いたものだと思いついた。ルートを逸れても進んでいけると肉体で体験した。極限までくたくたに疲れ、汗や泥や藪は不快で、危険をとまなう。それを覚悟して、自分で掴んで、踏んで、切

り拓く。それがバリなのだ。生きる、ということなのだ。
ああ、なんという説得力だろう。すべてがリアルに、手ごたえとして書かれている。こんなに具体性をもって描かれる実存感があつただろうか。それがこの小説の、美しくとてつもなく面白いところだ。

パリをはじめめる指南書として、会社員として振り回されるすべての人へ贈るエールとして、そしてなにより生きていく力そのものとして、最高の小説に出合つてしまった。

やまなか ゆき

一九八〇年 高知市生まれ。
TSUTAYA中万々店の書店員
なかしんぶん編集長としてX
(旧Twitter)やっています。
好きな本について喋るときだけ
饒舌になります。



人と社会を あたためる

松田 憲明

「お風呂キャンセル界限」という言葉がヤフートップのニュースに躍り出たのは確か今年の五月のこと。お風呂どころかシャワーすらも入らずに数日過ごす方が少しずつ増えているようだ。私たちは入浴剤メーカー。自社のオリジナル製品以外にも様々な企業の入浴剤を開発・製造している。高知でお風呂キャンセル界限というニュースに最も敏感に反応したのは私たちだったのではないだろうか。

私の家業である松田医薬品は事業の柱の一つとして「入浴剤の製造」を営んでいる。この事業は四十年以上前に、薬剤師だった今は亡き祖父が立ち上げたものである。入浴剤メーカーも様々だが、私どもは医薬品を扱う企業として、効果効能を追いつめるという特徴がある。そのためやや職人気質だった。こだわりの強い従業員が多い。か、こういう私もその一人である。入浴剤や風呂のことを語り出したら止まらない。そんな仲間と日々邁進している。

日本の入浴文化の歴史は古いが、家に風呂が導入され始めたのは昭和後期から。入浴文化・家風呂文化は日本の水道・ガスなどのインフラや家電技術が集積して形成された、世界でもまれな文化なのだ。そんな文化が危機に瀕しつつあると感じるニュースだった。そのような時流の中でも、私たちは

入浴剤を作り続けている。入浴やその効果を後押しする入浴剤づくりによって、社会に様々な貢献ができると考えているからだ。我々は「自然のあらゆる恵みを紡ぎ、人と社会をあたためる」というスローガンのもとに業務にあたっている。これに沿って様々なことにチャレンジしており、今回はその活動について語らせていただきたい。

まず基本なのだが、「人をあたためる」という点を説明したい。入浴には様々な効果があり、肌表面の衛生環境の向上による疾病の予防や、血行の促進による免疫向上、心身のリラクゼーションなど多岐にわたる。日々丁寧な入浴を推奨することで皆様のQOL（クオリティ・オブ・ライフ）が向上すると信じている。また、日々の入浴に加えて私たちの入浴剤を使ってくださる方には、入浴剤の効能により入浴体験を向上させ、更に効果的な入浴をしていただきたいと考えている。皆様一人一人が澁瀬として日々挑戦していただければ、縁の下の力持ちになりたいという



伊吹山「蘇湯」プロジェクトメンバーと環境保全に取り組む皆様

う想いで日々ものづくりをしている。これ以外にも、入浴剤づくりを通じて様々な社会貢献活動を実施している。スローガンの「社会をあたためる」の部分の活動だ。今回はその一つ「蘇湯」プロジェクトについて説明させていただきたい。

滋賀県と岐阜県の県境、日本百名山にも選ばれる霊峰、伊吹山。ここには千三百種の植物や二百八十種の薬草が育まれてきた豊かな風土と歴史がある。薬草を用いた民間療法も盛んで、薬草の入浴剤も古くから使われていたというのである。しかし、この山の植生が危機に瀕している。地球温暖化により鹿の生息範囲が増え、獣害を受けるようになってしまったのだ。これによって山の表面から緑はどんどん消え去り、地盤もろくなつてしまった。その影響で大雨の際には土砂崩れが頻発し、更に植生は失われていく。

このような課題に立ち向かう活動の一つとして立ち上がったのが「蘇湯」プロジェクトだ。既に前述の課題を解決するために、現地で薬草の栽培を始めている団体がいらつしやった。その薬草は株式会社資生堂によりエキシ化された化粧品に使われるのだが、どうしても余剰の薬草が出てしまう。これを入浴用ボタニカルにして商品化し、売り上げの一部を植生保護活動に充てようというプロジェクトだ。

このプロジェクトにあたっては、商品づくりをする前に社員たちと伊吹山に赴き、実際の植生保護活動に参加させていただいた。鹿から植物を守るための金属柵や金属ネットの運搬・設置などを身をもって体験し、またその風土や文化に触れることなしには商品づく

くりができないと考えたからだ。

結果的に、植物の味わいを活かすために原料の刻みを工夫したり、包材を現地で古くから薬草風呂で使われているような形に少しでも近づけるなど、様々なところにエッセンスを配置し、商品化することができた。販売はクラウドファンディングで行い、様々な支援者様のお陰で達成、寄付をすることができた。現在も促成保護活動には参加し、継続的な協業を続けている。この活動によって、霊山伊吹山の植生が豊かなること、また薬草を使うという昔から続く様々な知恵が次の代へと引き継がれること、これによって地域及び住民の皆様が健康になっていくことを願っている。

なんだかたくさん語ってしまったがこのような活動ができるのも入浴文化のおかげ。先に述べた通り家風呂は日本独自の文化であり、日本を長寿大国たらしめる要素の一つではないかと思っている。ぜひこれからの冷え込む季節にゆつくりと体を温めながら、日本の文化にどっぷり浸かってみてはいかがだろうか。

まつだ のりあき

松田医薬品株式会社 取締役営業
副本部長

立教大学を卒業後、二〇〇九年にアルフレッサ株式会社に入社。営業職を三年、経営企画を二年経験。二〇一九年に家業である松田医薬品株式会社に入社。二〇二二年五月より現職。

「ランデナ」 泳げドラゴン〈準備編〉



下尾 仁

今年六月、久しぶりに友人の千頭君（ちかM君）が店にやってきた。彼は文化高知No.234で書いた「仁淀川チューブ下り」（二〇一二年夏、越知町の筏津ダムから海を目指し、タイヤチューブに乗って川下りをしたが結果的に海まではたどり着けず、いの町「土佐和紙工芸村くらうど」の辺りで下るのを断念した）のメンバーである。彼は来るなり「文化高知No.234を読みました、海を目指していた事を知りませんでした。是非今年、途中で川下りを断念した地点から再び海を目指しませんか」と真剣な顔をして言ってきた。

で撮影班も決まり、十二年ぶりのプロジェクトは進み始めた。

次の休日、船のベースは何がいいだろうと考えていた僕は、近所で粗大ゴミを分別処理している所に行き、物色させてもらった。すると長さ一二〇センチ、横四〇センチ、幅三〇センチぐらいの「クスリ」と書いた真つ赤なプラスチックの看板を見つけた。この中に発泡スチロールを詰め込んだらいいと思い、看板を処理業者に貰い受け、船の心臓部を手に入れる事ができた。

あれから十二年、干支もひと回りしての彼のこの言葉。僕も川下りの事が心のどこかに引っかかっていたので、よし！やろう！と決めた。しかし十二年前の体力はなく、前回と同じ推進力のないタイヤチューブを使うのはかなり

の労力。そこで僕は粗大ゴミで二人乗りの船を作りゴミの気持ちになつて下るのはどうかと提案してみた。ちかM君は「面白いじゃないですか」と乗ってきたので、すぐに作戦会議。実施日は前回と同じ八月二十一日・二十二日の二日間。その時店にいたお客さんが「撮影しますよ」と言ってくれたの

しかし作戦会議をしてから二か月、ちかM君から全く連絡がない。本当にやるのか？と思っていたとあつという間に八月なつてしまった。すると彼から突然連絡があり「いよいよ今月になりましたね。船はいつ作りましょうか」とやる気満々に言うので、僕の次の休日に集合し船の製作作業を行う事になった。当日、何か使える物はないかと家の中を探しているとサーフボードや灯油のポリタンクを見つつけ、これは使えそうだと準備をしていると、ちかM君がやって来たので準備した物で製作を開始。まず「クスリ」の看板に発泡スチロールをパンパンに詰め、看板の下にサーフボードをくくりつけ、後方



完成した泳げドラゴン

部にヤジロベエのようにポリタンクを一個ずつ付けてみた。作業をしていると撮影班の山下さんが来て「製作作業も撮影しましよう」と言ってくれたので、まるでドキュメンタリー映画でも撮影しているかのような気分。作業も進み、それっぽくなってきた船。果たして二人を乗せてどれだけ浮くのか？鏡川の緑の広場に船を持って行き浮かべてみる事にした。鏡川に向かう道中、船の名前を決めようと思案を出しあつた。十二年前と今年の干支が辰年だったので「泳げドラゴン」という名に決定した。現地に到着しドラゴンを川に浮かべてみるとしっかりと浮いている。ちかM君が勢いよく跨ると、すぐにバランスを崩して沈（笑）。次は慎重に二人で乗ってみたが、やはり半分ほど沈んでいる。もつと浮力をつけバランスを良くしなくてはいけない事がわかり、製作一日目は終了した。

川下りまであと十四日、僕は毎日少しずつドラゴンを仕上げていった。前方部にも後方と同じようにポリタンクを付けて浮力とバランスを良くし、できるだけ浮力のある物をドラゴンに付

け、誰が見てもしつかりした船に仕上がっていた。せっかくだから頭も作ろうとカットウィッグの首をベースに顔を作り前方に取り付けた。後方に尻尾も付け、オールも塵取りで二本作り、ついに泳げドラゴンは完成した。

今後の計画としては、川下り前日にちかM君の軽トラにドラゴンを乗せ、仁淀川近くの彼の家に運ぶ。本番の日、朝七時に仁淀川の波川公園で待ち合わせ。いの町の「くらうど」に向かい、朝八時から川を下り始め、約一〇キロ先の八天大橋でキャンプし、二日目はいいよ海を目指すとした。残念ながら撮影班は昼まで仕事なので終わりに次第来てくれる事に。計画通りいくのか、そもそも浮くのかもわからなかったが、時間もななくぶつけ本番で川下りをする事となった。予定どおり前日にドラゴンはちかM君の家の向かうべく軽トラに乗り出発していった。

ドラゴンを見送り、店にいたお客さんたちと「明日楽しみやね」と話をしていると、真つ黒に日焼けした青年が店にやってきた。初めて来店した彼であつたが手には見たことのある物にざりしめている。それを見てすぐ僕に「明日一緒に仁淀川を下ろう！」と彼を誘っていた。（つづく）

しもおひとし

一九六九年生まれ。

岡豊高校一期生。二十五歳ぐらいに演劇に目覚め、日夜面白い事はないかとキョロキョロしている。

9～10月の事業から

大阪交響楽団 CONCERT THE WORLD OF JOHN WILLIAMS



大阪交響楽団をお迎えし、映画音楽の巨匠ジョン・ウィリアムズの作品だけを演奏するコンサートを開催しました。

長きにわたり映画を彩ってきたジョン・ウィリアムズの音楽をお楽しみいただけるよう、曲目はこちらから事前にリクエストし、調整を重ねて高知オリジナルプログラムでの演奏会となりました。ご来場の方には一度は耳にしたことがある楽曲を迫力のフルオーケストラでお聴きいただけたのではないかと思います。

また、楽曲や映画解説を指揮者の佐々木新平さんがしてくださることで理解が深まり、より感動するものとなりました。演奏中は情熱的に指揮をしてくださった佐々木さんですが、演奏会やジュニアオーケストラの指導のため何度も来高しており、歴史好きでもある佐々木さんからは高知城の話や美味しいお店の話など、高知愛溢れるトークに気さくなお人柄が見え客席から笑いが起こる場面もありました。



ソリストの北川さん（左）と指揮者の佐々木さん（右）

ソリストの北川千紗さんは四国初上陸、『シンドラーのリスト』の演奏も初めてのことでしたが、美しく切ないヴァイオリンの音色にホールが包まれ、客席が音楽の世界に引き込まれている様子が見てとれま

した。映画の中で赤い服を着た女の子が登場するのが印象的で、この曲を弾く時はコレ！と決めていたという赤いドレスでの登場でした。

本公演では、一般のチケットの他に「子ども無料チケット」「子ども同伴の保護者半額チケット」を文化庁の助成のもとご用意していましたが、どちらのチケットも早々に完売となりました。コンサート当日は同伴チケットを入手できなかったお母さんが、子どもたちだけでホールに入る様子を心配そうに見送る姿も見られ、スタッフも小さなお客さまのコンサートデビューを見守るような気持ちで出迎えました。初めは不安そうに座っていた子どもたちですが、いざ演奏が始まるととても集中していて、生で聴くオーケストラに何かを感じてくれていたのであれば嬉しいなと思いました。

また、楽団のご厚意により、本番前のリハーサルの様子を、県内の吹奏楽部やオーケストラに所属する約二百名の子どもたちと指導者の方に見学していただくこともできました。

開催日 九月七日（土）

会場 かるぽーと四国銀行ホール
入場者数 九百四十六名

高知市文化振興事業団

合唱組曲 四万十川 コンサート

令和五年十月、約百三十名の合唱好きが、県内外から、かるぼーとに集まりました。合唱団に長年所属して活動が続けるベテランから「私、合唱は初めてなんです」という初心者まで、様々なメンバーを含めた四万十川合唱団の結成です。平成十一年七月に初演を行った『混声合唱とオーケストラのための組曲『四万十川』』ですが、二十五年前の公演が決まりました。当時の組曲誕生秘話や、五部構成のこの曲の見どころなどは、ぜひ文化高知No.236をご覧ください。

四万十川合唱団は、合唱が初めてのメンバーも、パートごとに一曲一曲音取りをし、何度も歌って一年間練習に励んできました。初めは自信なさげな様子であった『四万十川』が、練習を重ねるにつれ、聴いている事業担当者の私まで心震える『四万十川』へと成長しました。ついに迎えた令和六年十月六日、コンサート当日。第一部は、今回のために地元合唱団のメンバーが中心に集まった、

方舟有志合唱団による混声合唱組曲『方舟』の演奏です。お客様からは、エネルギーで美しい歌声が印象的だったとの声をいただきました。続いて第二部は、ソプラノ声楽家の松下悦子氏に、長篇歌曲『野梅』を演奏していただきました。美しいピアノの音色と力強く美しい歌声のハーモニーに会場中が魅了されました。いよいよ第三部です。『四万十川』作詩の山下正雄氏と、作曲の木下牧子氏、高知県合唱連盟副理事長の飯谷哲郎氏が登壇し、初演当時の貴重なお話を聞くことができました。そして、キリっとした表情でステージを見据えて入場した四万十川合唱団。力強く、自信に満ちた歌声は、傍で見ている私の緊張を一瞬で吹き飛ばしました。

しいお言葉もいただきました。コンサートを終えた団員の皆さんの顔は、満面の笑顔へと変わっており、「次はみんなで〇〇歌いたいね」と、また私の心をワクワクさせてくれたのでした。



開催日 十月六日(日)
会場 かるぼーと四国銀行ホール
入場者数 四百五十九名



高知を撮る

第34回写真コンテスト入賞作品

「鏡川の大柳」

(平成17年 高知市旭 鏡川)

戸梶 忠俊

鏡川の紅葉橋下流の川中のシンボル大柳。何十年も風雪、洪水にも耐えていたが水流の変化でなくなった。残念です。

『彼は早稲田で死んだ』大学構内リンチ殺人事件の永遠〜(樋田毅著作)を読んで感慨が深い。個人的事情がある。

一九七三年四月二日、私は早稲田大学文学部の新入生として入学式場にいた。そのとき異様な光景を目撃した。大学総長の祝辞の途中で一群の学生が無言で入場して来て演壇の下に横一列に並んだのである。先頭の学生——飄々とした

風貌で髭をはやした若者——が「革マル追放」「早稲田解放」と書かれたプラカードを高く掲げた。会場に声にはならないどよめきが走った。その半年前に革マル派のリンチによって文学部の学生が死亡したことは報道で知っていた。けれど事件は終わったものと思っていた。私の目は学生達に釘付けになった。

そのとき、会場にさらに大きなどよめきが起った。黒いヘルメットをかぶった数十人の集団が隊伍を組んでなだれ込み、演壇の上に駆け上ったのである。総長をはじめとする教授陣は蜘蛛の子を散らすように逃げ散った。黒ヘルメットの集団はマイクを取って新入生達に向かって激越な言葉で革マル派批判の演説をはじめた。彼等は最初に入場してきた学生

彼は早稲田で死んだ



風俗歳時記

達とは明らかに異なる集団だった。それに対して、新入生の中から「帰れ！帰れ！」という声が上がりはじめた。やがてそれは新入生全体に広がり、会場を震わすばかりの大シユプレヒコールになった。自分達の晴れの式を暴力的に侵害されたことへの怒りがこめられていた。怒号と絶叫の中で入学式は中止された。あれは一体何だったのだろう。革マル派が暴力的だったことはわかるにしても、それを糾弾する黒ヘル集団もきわめて暴力的に感じられた。その後、断片的説明はいろいろ聞いたけれど、入学式粉砕事件の全体像は結局わからないまま五十年が経過した。

それがこの本を読んでクリアーに理解できた。著者は、あの日プラカードを掲げて立っていた若者——樋田毅氏だった。リンチ事件を知ったとき樋田氏が何を感じ、どう行動し、その運動がどう分裂し(非暴力派と武装闘争派に)、そして挫折していったのか。そのプロセスが克明に書かれている。

半世紀の年月を経て、自分の学生時代をはじめて俯瞰した思いだった。(本の虫)

LINE 公式アカウント 「かるちゃーず」

(高知市文化振興事業団サポーターズクラブ)

事業団主催事業の
最新情報配信



web 版
「文化高知」配信

無料招待の
ご案内

横山隆一記念
まんが館企画展の
割引クーポン発行

友だち募集

※LINEの「友だち追加」からQRコードをスキャンしてください。

風伯

特別電車

六回目の没日供養に私も出席した。往復は電車。高知市西部の電停発、大橋通下車。法要場の高野寺はすぐだ。読経に癒される。集合写真の端っこに納まる。ここには板垣の生家があった。私は電車に乗るたび板垣を思い出す。当時の電車は前面救助網付きの木造四輪電動客車。板垣を迎えに行ったのは電車だけではない。出迎えの伊野町

その日板垣退助は高知市唐人町に投宿していた。一九一〇年三月十一日午後二時、板垣は宿を出て「差し回せし特別電車」に乗り込む。差し回しの馬車とかではない。主賓一人に差し回しの特別電車なんて、古今東西板垣ぐらいいではないか。伊野線開通二年目の路面電車は西進し、終点に向かった。二〇二四年七月十六日板垣法要。百

長、町会議員二人、および伊野警察署長を先導とし、社会改良会専務理事、同会理事、従者、土陽新聞主筆も同乗。朝倉で吾川郡長も出迎える。板垣が特別待遇で伊野へ向かったのは、板垣の社会改良の意見を聞きたいと同町有志が熱望したからだ。板垣の日程には隙間などなく、帰京の延期までした。果たして伊野小学校での大演説会となった。板垣は「伊野は小都会で富豪の人も多い」「集散地における富豪資本家の責任」と語り、当時の伊野町の影響力が推し量れる。演説は国民に産業、福祉、選挙など「自覚自動」を促すもの。今日でも耳が痛い。法要は盛会で、板垣会の総会もあり、懇親会場へ大半は歩いて移動。板垣の乗車場は知らないが、会場まで西へたつた二駅なのに板垣より早く電車に乗る。あら、二人お仲間が同乗してきた。気分は差し回しの特別電車。

(三)

© 2023 SHOWBOX AND STORY FOREST ALL RIGHTS RESERVED.



第205回 市民映画会

2025年 2月6日(木)
7日(金)

高知市文化プラザかるぼーと 四国銀行ホール

上映時間
恋するピアニストフジコ・ヘミング
①10:30 ②15:10 ③19:20
母とわたしの8日間
①13:10 ②17:25

【入場料】一枚のチケットで両方の作品をご鑑賞いただけます。

一般：前売券1,300円、当日券1,500円

割引：1,000円(映画会当日に会場で販売)

※学生証、長寿手帳、障害者手帳をお持ちの方は割引!

【お問い合わせ】高知市文化振興事業団 088-883-5071



©2024「恋するピアニスト フジコ・ヘミング」フィルムパートナーズ

今号の表紙

りんご

千頭 天

秋になり、りんごが朽ちていく様子をコミカルに表現しました。

(ちかみ そら／

龍馬デザイン・ビューティ専門学校2年生)

第13回

高知の
音楽活性化事業

松本 蘭

Ran Matsumoto Violin Recital

ヴァイオリン リサイタル



ピアノ | Yukari Arai |

新居 由佳梨

Program

- ジェシー・ボック (ジョン・ウィリアムズ編曲)
- 「屋根の上のヴァイオリン弾き」
- アストル・ピアソラ
- 「ブエノスアイレスの冬」
- 「リベルタンゴ」
- パブロ・デ・サラサーテ
- 「ツイゴイネルワイゼン」 他

2025年 2月1日[土]

令和6年度 公共ホール音楽活性化支援事業



かるぽーと

高知市文化プラザかるぽーと
四国銀行ホール (旧大ホール)

開場 13:30 開演 14:00

チケット

一般 / 前売り 1,000円 当日 1,200円
高校生以下 / 前売り 500円 当日 600円

※3歳から有料 ※前売券完売の場合、当日券の販売はありません

全席
自由

お問い合わせ

公益財団法人高知市文化振興事業団 TEL:088-883-5071
<https://www.kfca.jp/kikaku>

ヴァイオリンとピアノの音色が織りなす珠玉のハーモニー